

## 書 評



本田弘之著

## 文芸から「改革開放」期における 中国朝鮮族の日本語教育の研究

ひつじ書房、2012年発行、293p.

ISBN : 978-4-89476-591-7

田中 祐輔

### 1. はじめに

中国は日本語教育がとりわけ盛んな国であり、本田弘之氏（以下、「著者」）自身も中国国内で日本語教育に携わった経歴を持つ。本書は、早稲田大学大学院日本語教育研究科に提出された博士学位申請論文をもとに執筆され、現代中国における朝鮮族への日本語教育の特徴と果たした役割、さらにそれが朝鮮族社会にどのような影響を及ぼしたかについて資料とフィールドワーク、インタビューを用いて考察したものである。

著者はその中でも、(1) 朝鮮族の日本語教育の歴史、(2) それが中国の日本語教育の中でどのように位置付けられるか、(3) 朝鮮族コミュニティにおける日本語教育の意味、にフォーカスしている。そして、その経緯や内容を明らかにすることで、「中国朝鮮族の日本語教育とはなんだったのか」(p.2) を明らかにすることに取り組んでいる。本書は以下の4章で構成されている。

はじめに

第1章 研究の目的と方法

第2章 中国朝鮮族と少数民族教育

第3章 中国朝鮮族の日本語教育

第4章 朝鮮族の日本語教育の変遷とその構造

参考文献

おわりに

索引

### 2. 本研究の位置付け

著者によれば、中国における朝鮮族への日本語教育は、教育制度や統計、法令、あるいはその歩みに関する資料や先行研究はあるものの、民族学校の具体的教育内容やそれぞれ

の日本語教育実践、与えた影響について具体的に明らかにされてきたわけではない。殊に、著者が着目する文化大革命期から改革開放期については顕著であり、その理由について著者は次の三点を挙げている。第一に、変化の激しい時代にあつて、学校教育に関しての記録があまり残されていないこと。第二に、朝鮮族の日本語教育が主として民族中学という民族コミュニティ以外の人々には閉ざされた社会で展開されており、あまり公開されることがなかったこと。第三に、朝鮮族の日本語教育はかつて「満州国」時代に日本語教育を受けた世代によって担われ、戦後の日本人や日本社会とほとんど関わりを持たずに行われてきたこと。以上の困難がある中で、本書は、当時の関係者へのインタビューや過去に使用されてきた教材などの資料を駆使して、中国における朝鮮族への日本語教育の実相と変遷を詳細に描いている。

### 3. 現代中国における朝鮮族の日本語教育

著者によると、中国朝鮮族の日本語教育は中国の日本語教育において少なくない存在感を示してきた。1990年の時点で、中国の日本語学習者のおよそ3割が朝鮮族の学習者であり、朝鮮族に占める日本語学習者の割合も4%に達していたという。特に1970年代中頃から1990年までは、中国の日本語教育全体に占める朝鮮族の日本語教育の比重は高く、朝鮮族にとっても日本語学習に重要な意味が見出されていたことを指摘している。

著者の調査によると、1970年代末に再開された朝鮮族の日本語教育は1945年以前に「日帝」によって強制された日本語の教育を、朝鮮族の人々が自立的に再開したものであり、そこに一つの転換が見られる。この時期、朝鮮族の若い世代は戦前の「満州国」時代の影響から肉親に日本語を話す者が多く、日本語に触れる機会があった。さらに、外国語を教える教師の不足から日本語が大学外国語入試科目として採用されていた。これらは飽くまで便宜上のことで、特段朝鮮族と日本語とを結びつける明確な意識や意図はなかったという。しかし、徐々に入試の得点率で朝鮮族の日本語学習者に有意な差が出始めたことや、地理的な要因などで、1980年頃には朝鮮族の学校では日本語が外国語として選択されるようになったという。筆者はここに、朝鮮族コミュニティが、かつて侵略主義的な目的で行われていた日本語教育を民族教育振興目的の教育へと変容させたことを指摘し、「朝鮮族による朝鮮族のための日本語教育」(p.134)という意識が1980年代半ばには確立していたと述べている。

### 4. 各章における主な主張と内容

第1章では研究の目的と方法、問題意識が述べられ、中国の教育政策や民族教育に関する基礎資料と少数民族、および、朝鮮族に関する先行研究について紹介されている。また、実施されたインタビュー調査の期間と場所、対象などについて述べられている。本書で取り上げられているインタビューデータは5名で、それぞれ、1978年の日本語教育の再開当時若手日本語教員の一人であった遼寧省の教師A氏、高校在学中に日本語の学習が始まり民族師範大学を卒業した黒竜江省の教師B氏、中学入学と日本語教育の開始が重なった

黒竜江省の教師 C 氏、民族師範大学出身で現在遼寧省の中学に勤める教師 D 氏、大学卒業後日本語教員として教壇に立つ教師 E 氏、以上である。

第 2 章では、以降の章における考察の前提として、研究対象とする朝鮮族の全体像を概説している。その成立過程や居住エリア、言語生活の様相、少数民族教育と制度、入試と進学競争、直面している問題点、など幅広い観点から述べられている。民族教育は、義務教育諸学校における教育を、その民族固有の言語で受けることが認められた極めて進歩的な制度であるが、一方で、それが機能するためには、様々な困難を乗り越えて行く必要があり著者はその内実について詳述している。また、朝鮮族の持つ歴史的背景や勤勉性への定評、就学率や上級学校への進学率の高さ、激しい進学競争、そうした様々な要素から日本語教育が選択された経緯についても述べられている。現実には、日本語の人材育成の面において、あるいは、受験という限定された側面においても、朝鮮族の日本語教育は一定の成果をあげてきたと言えるが、2000 年以降の中国の高度経済成長の渦中において、朝鮮族の民族教育は「漢語化」と「トランスナショナル化」という二つの力にさらされ、新たな局面を迎えている。本章ではその結果としての、コミュニティの縮小と解体、さらに消滅の危機にあることについても述べられている。

第 3 章では、朝鮮族の民族中学における日本語教育について、前掲インタビュー調査による証言データと周辺資料を用いて考察を行っている。本題への足掛かりとして、朝鮮族と日本語教育との関係を「満州国」時代の朝鮮人教育にまで遡って把握し、その上で「文化大革命」に至るまでの流れと、その特徴を探っている。さらに、朝鮮族中学において、文革後再開された日本語教育がなぜ進められたのか、そして、なぜ、それは英語教育ではなく日本語教育であったのかについて扱い、朝鮮族の人々の日本語に対する意識の変容や周辺環境の変化について詳述されている。その上で、こうした教育の特質について、中国の大学専攻課程の日本語教育との比較から考察している。加えて、朝鮮族中学で 1980 年代から現在にかけて使用されてきた教材についても分析し、教科書が果たした役割や特徴を明らかにしている。

第 4 章では、朝鮮族の日本語教育が中国の日本語教育において果たした役割と、日本語教育が朝鮮族コミュニティに及ぼした影響について考察している。著者によると、当初、朝鮮族の日本語教育は「満州国」の朝鮮人学校の「国語」教育の流れを汲んで始められたため、外国語教育としての意識がほとんどなかったそうである。しかし、1980 年代に入ると、英語教育の進展に影響を受けた改革が行われ、内容や手法に変化が見られる。この 1980 年代から 1990 年代にかけて、中国の日本語教育は大学の日本語教育と朝鮮族の民族教育としての日本語教育とが大きな二重構造をなしていたと筆者は指摘しており、「公」と「私」、あるいは「官」と「民」という形で人材供給が分担されてきたと分析する。すなわち、朝鮮族の日本語教育は、現代中国の経済的発展に際し急務とされた大量の日本語人材の供給を担う役割を果たしていたといえるのである。さらに、そうした朝鮮族の人材の活躍は、それまでは中国東北地方に集中していた日本語教育が各地に普及したきっかけともなると指摘し、朝鮮族の日本語教育によって中国の日本語教育の社会的地位や範囲が拡大される結果に結びついたことを指摘している。以上を通して、朝鮮族の日本語教育が、中国の日本語教育に果たした役割を丁寧に論証した上で、逆に朝鮮族が日本語教育からどのよう

な影響を受けたかについても検討し、日本語教育によって活躍の場に広がりを見せた朝鮮族が、その副産物としてコミュニティの縮小と解体を招く結果となり、存続そのものを危うくしてしまっている現状について論じている。

## 5. 本書の意義と展望

本書は、これまで着目されることの少なかった中国における朝鮮族への日本語教育に焦点を当て、その歩みや実態をインタビュー調査で得られた証言などを手がかりに詳細に分析し「中国における朝鮮族への日本語教育」の具体像を描き出している。本書の研究を通じて収集された情報は、後続の研究にも大いに活用され得るものであろう。既に述べたように本書が扱う範囲や対象は広く、扱われている資料も多いのだが、読者に変わりやすく整理されており、そうした意味でも参考資料としての価値は高いと感じられる。著者が日本語教育史の分野に築いた業績や育成した人材と併せ、本書は当該分野の今後のさらなる発展の礎として金字塔ともいえる研究書であるものと考えられる。

また一方で、本書は、中国における朝鮮族の日本語教育の歴史の変遷を詳論した実証研究でもある。現在の実践活動に関心がある読者にとっては、歴史研究の意義は強く実感されることが少ないかもしれない。しかし、歴史というものは一般に、我々が直観的に想像するよりも遙かに根強く、現在や将来の物事のあり方を規定しているものである。例えば本書でも言及されている教材について言えば、前例や時々の日本語教育を取り巻く背景によって形作られる側面が必ず存在する。教材の内容は変遷しているものの、その変遷の仕方はさほど自由ではなく、過去によって強く規定された経路を辿るものなのである。したがって、「現在、なぜこのような教育が行われているのか」を理解する上で、歴史的考察は欠かすことができないとすら言えるのである。また、今後の日本語教育の改善のために何らかの改革を試みる場合であっても、現在の教育が形作られた経緯を正確に理解していなければ、有効な変化を起こすことができずにかげ声倒れに終わる可能性もある。たとえば、著者が指摘するように、中国において朝鮮族への日本語教育が少なくない役割を果たしてきたのであれば、そのことを考慮せずに教育制度や教育内容、あるいは教材だけを改革しても、現場の教育は上手くいかないかもしれない。

こうしたことを考えれば、現在や将来の日本語教育の実践をより効果的に行う上でも、本書のような歴史研究から得られる知見は少なくないと言えるだろう。とりわけ、中国における日本語教育は、その目的や手段が大きく方向転換する時期を迎えているとされる。今後のあるべき教育思想や基本方針を検討する上でも、過去にどのような人々に対し日本語教育が行われ、その教育内容や手法がどのような教育目的のもとで展開され、どのような影響を与えてきたかを正確に理解しておく必要はあり、本書が提示する中国朝鮮族の日本語教育の史的研究は、貢献するところが大きいであろう。

(たなか ゆうすけ 東洋大学国際教育センター)